

書評論文 半澤朝彦編著『政治と音楽 国際社会を動かす“ソフトパワー”』

(晃洋書房、2022年)

田中 公一朗

1. はじめに

2022年4月、半澤朝彦編著の『政治と音楽 国際社会を動かす“ソフトパワー”』(晃洋書房)が刊行された。1ヶ月少して重版になったという。そこで、同書の内容を紹介しつつ、その意義と課題を挙げてゆきたい。この本の構想が大きく、さらに論文著者が12名、コラムと補論が合計8本ある広域をカバーした書籍であり、統一的、包括的な議論がしにくい面があることをご承知いただきたい。ただ、出るべくして出た本という表現が相応しいと躊躇なくいえる書籍であろう。

そこで本稿では、まず本書の全体構成を概観し、章の構成と各章の内容を簡潔なコメントも含ませつつまとめていきたい。そして個々の論文を、セグメントとして分けながら、国際関係論(国際政治学)の中での位置づけを試みたい。ワンフレーズでまとめれば「政治学から音楽へのアプローチ」である(第2節)。

第3節では、とくに本書でコアであるナショナリズムや国民国家、またグローバル化時代、ポスト・グローバル化時代の政治と、音楽芸術の関係を確認してゆこうと思う。この部分は本書が集中してテーマ論化し、論文として提示している部分、すなわち国歌であり、また提示されている部分自身がそのまま本書の課題になってくると考えられる。それはたとえば、エブリデイ・ナショナリズムや映画やゲームの音響(映像音響)ということになる。

第4節では、音楽学、音楽社会学ではしばしば「政治と音楽」は扱われてきたことにふれよう。こちらは「音楽学から政治へのアプローチ」である。この2つの研究対象は重なっているが、接近方法が違っても考えてもよいだろう。

いずれにせよ、本書によって、国際関係論にとってほとんど未踏の領域が切り開かれたのは間違いない。個別の研究の戦線が繋がったという表現がよいだろう。

2. 本書の概略、また国際政治、国際関係論での位置づけ

さっそく本書の紹介に移行したい。といっても編者でもある半澤朝彦(以下敬称略)が「はじめに」の部分(p.i～xiiiに相当)で章ごとに要旨をまとめているので二重になってしまう。全体は3つの部から成り、それは「政治的動員と音楽」(第I部)「音楽とアイデンティティ・表象・規範」(第II部)「グローバル化と音楽」(第III部)という順序になっていて、さらにそれぞれの部が3つの章から成っている、そういう構成である。驚くような事例も少なくないが、やや長いので読者は軽快に「第3節」(68ページ)へ飛躍していただいてまったく構わない。

第1章、本書のある種の宣言にあたる部分は、音楽学では有名な「エストニアの合唱団」についての分析が大中真により加えられる。とくにエストニアとドイツとの合唱の関係と国家形成、国家の独立やソ連による支配、それに対する抵抗的な合唱音楽と国歌、また「歌の祭典」の機能や政治的な意味が語られる。

第2章では、イギリスが帝国の自己像が、エドワード・エルガーなどのカンカータや仮面劇によって制作されてゆくプロセスを確認してゆく。第一次世界大戦後のマクドナルド内閣下で帝国博覧会(1924年)が復興の意味も持たせ開催される。ウェムブリー・スタジアムが建設され、またマス・ゲームのようなページェントがラジオ中継を含め上演され(作曲者はエルガー)、帝国からコモンウェルスに変容してゆく英国の歴史的展開が示される。等松春生氏による優れた論文だ。第3章は、ナ

チスドイツによる、成功したとは呼びづらい「退廃音楽展」と、「自由か制限か」と容易には判定できないナチス体制について芝崎祐典氏が考察を加える。戦後のアメリカ占領下では占領されたドイツ側主導で文化政策が行われてゆくことが明らかにされる。

ここまでは、政治主体、市民も含む権力主体と芸術の関係から、どのように国家や国民意識、「第二の国歌」が誕生し効果を持ってくるかを丹念にたどる論文が並ぶ。

第4章、齋藤嘉臣論文、ここではジャズの場合、上記ナチスドイツの退廃音楽展とほぼ同時期に、スウィング・ジャズが人種統合の理想と期待であったが¹、現実にはそうではなく、ジャズに乗せた踊り「ジダーバグ」が非難されていたこと、赤狩り期（マッカーシズム下の時代を含む）にジャズ関係者も連邦保安局の監視下にあったことが指摘される。またユネスコの国際ジャズデーのもつ政治性にも注意を促している。

次の第5章も興味深い論点設定である。現代アラブの集団的アイデンティティや空間意識、という設定だけでもすこぶる重要な問題を内包していると思われる。アラビア語で生誕地を意味する「ワタン」に対して、エジプトの思想家タフターウィーがフランス語の「祖国」(patrie)の意味を付与し、「ラ・マルセイエーズ」をアラビア語に訳しているという。またアラブ諸国のアイデンティティや文語と口語の問題はアラビア語学習者にとっては乗り越え難い壁になっているが、国歌の場合そうとはいえないケースが挙げられている。政治力も持っていたとされるアラブの歌姫ウンム・クルスームが歌った曲「久しいな、我が武器よ」が、口語エジプト国歌として採用された。福田義昭は、異例であると述べているが評者も同感である。「言語イデオロギーに反する唯一の事例」(福田)なのである。さらに同曲はバアス党下のイラク国歌にまでなった(1981年廃止)。また現行のアラブ国家の6カ国の国歌はエジプト人の作曲であるとの指摘もある。愛国歌と国歌を同一視していないアラブ諸国の普遍主義的な面的一端を見出してもよいのかもしれない。

日本の戦時期におけるユダヤ人演奏家の受容と、ジェンダー女性ピアニストの関係が第6章である。山本尚志のこの論考によれば、ドイツは日本にユダヤ系音楽家の排除を要求したが、外務省は在日ユダヤ系音楽家が日本で支持されていることを理由にしばしば抵抗した。「学問と芸術の普遍性と国際性を重視する日本国内の指導層と国際世論の危惧が日独文化協定(注:1938年)によって高ま」ったという²。ユダヤ系ピアニスト、レオ・シロタ(ブゾーニの高弟)やレオニード・クライツァーはすでに著名であり、日本での演奏会需要があり、2人は東京音楽学校の教師になっている。また、その頃ピアニストは女性の方が多く、戦前のピアノ教育では女性の比率が高かった。戦況が悪化した1943年以降もユダヤ系の音楽家と女性ピアニストの間の紐帯が途切れなかった。

以上が第Ⅱ部であり、音楽の周囲ではアイデンティティ・ポリティックスが機能している、という平坦でストレートな事態ではまったくないことが判明する。より複合した要素や理念が相互に絡まり合っている。

第Ⅲ部、こちらは、グローバリゼーションと音楽というテーマ設定で、第7章ではクラブミュージックと直接民主主義(制)の関係を歴史的に追っている。五野井郁夫は都市に注目し、特にベルリンとロンドンをテーブルに上げている。クラブミュージックは、「セカンド・サマーオブ・ラブ」からの流れが先進都市のいくつかに伝播し、それがベルリンではレイヴ文化として成立した。特にシェンゲン空間の拡大が、若年層の移動性を高め、「ラヴ・パレード」という形で結実していった(2010年で中止)。

一方のロンドンではリクレイム・ザ・ストリートとして自動車利用反対運動から市民の不服従運動となった。そこから公共空間が誕生してきた。「普通の人々」が怒りと楽しみたいという感情の中から、そしてリーダーがない中で生まれてきた運動を「フェス公共圏」と五野井は名付けている。

この「ジャスティス」に対する運動は、一方では音楽資本やプロモーターによって政治的な意味

1 この点は映画『ベニイ・グッドマン物語』(バレンタイン・デイビス監督、ユニバーサル、1955)でも確認できる

2 本書、p.111

を剥奪され、そして世界各国で開催されている巨大なフェスティバルになっている面もある。とくにCovidが広がる前年、2019年までは数万人規模を動員するフェスが、世界で年間300回は行われていた。興味を引くことに、結局は企業スポンサーに囲まれてはいる「フェス公共圏」の内部で、フェス参加者が相互に話し合い、ダンス・ミュージックが好きという一点で瞬間的に結びつく。そして音楽だけではなく社会の状況について話し合う光景が日本でも見られた。通常の音楽コンサートでは、見知らぬ人と会話はしないという慣習と呼べぬ慣習があることを考えれば、特異な現象だと思われるかもしれないが、それはダンスミュージックに関しては当てはまらない。

アメリカ合衆国のマインドセット、「軍事的なるもの＝愛国的なるもの」が音楽や映像を媒介にして市民のメンタリティーに埋め込まれてきた、というのが第8章の前田幸男論文である。個人を主体化し、兵士を供給する。テレビ、ラジオ、広告、映画が暴力文化を内包し（戦争や戦闘、物理的暴力はゲームや映画に溢れかえっている）、戦場はヴァーチャル空間を経由して「市民生活」のど真ん中に位置しているという。このことの持つ意味は大きく、戦争の映像を繰り返し見たり、経験したりすることで、死への畏敬は喪失する。スクリーンを見て相手を攻撃すれば、相手（「敵」）との直接の接触はなくなる。この論文後半で、映画や従軍報道システム、そして軍事主義のマイクロレベルの浸透といった日常のマイクロな政治について議論を進めている。私見だが今後この部分の論考がより拡張されてゆくことを望みたい。

佐渡では、「鼓童」という和太鼓集団が活動していることを知る人も少なくないだろう。和太鼓を著名な楽器にし、「日本」の音楽的イメージの一片を形成している。和太鼓は宗教的なものであり、興業、興行には使われることはほとんどなかった。ところが1950年以降、ジャズドラマー小口大八などにより、民俗芸能から観客に体験してもらう機会に変わる。鬼太鼓座、鼓童といった著名なグループが登場し、オリエンタリズムの要素を期待している観衆に合わせるかのように海外で人気が出て、文化庁もそれを支援するという交錯した文化交流が行われる。それが第9章「グローバルとローカル - 佐渡から見るソフトパワーとしての「鼓童」-」の細田晴子論文である。パブリック・ディプロマシーは予想を超えた結果をしばしばもたらす事例として挙げられている。

第IV部 世界を読み解くは、ブルース（ブルーズ）を歌う人類学者、佐藤壯広論文で始まる。非正規雇用、大学、ワークショップ、また沖縄の遺骨捜索作業としての場でそれぞれブルースが歌われ、また唸る。そのフィールドワークであり、体験的記録でもある。個人的なことが政治的、社会的なことであることを実践する場として「歌う人間学」と規定している。ブルース曲の歌詞も出ている。藤本和子『ブルースだってただの唄』の生活を文字通り生きる様子が眼に浮かぶ。

第11章も実践的な活動を考察するもので、大学の講義でどのように音楽を体験してもらうかという経験を分析した芝崎厚土論文である。たとえばそもそものはじめに戻ると、「音楽を学校空間で聴く」とはどういうことだろう。「情緒」の育成なのか。音楽鑑賞という授業形態は現在も存在している。音楽を聴く（実際には聴かせられるのだが）ということに対し、音楽に何らかの意味を見出すことが要求されているのだろうか。この曲はいつの誰が書いた作品でどういう背景があり、ということが知識としてわかればいいのか。ポール・ウィリアムスを引用しつつ、音楽とは「体験」であり「感じることなのである」という視点を取る。これは現象学的なアプローチであろう。音楽を聴いて人はそれぞれなにかを感じる。なにも感じないかもしれない。しかし、そのことをさまざまな曲、特にポップスやブルーズを、歌詞を提示しながら聴いてもらい、感じたことを文字化してもらうという。佐野元春、ボブ・ディラン、高田渡、プリンス、ジャネール・モネイなどの楽曲を扱い、さまざまな感想が出てくるなかで、グローバルな共感の連鎖の可能性を見出している。

第12章は、本書の編者でもある半澤朝彦論文である。ここでは2021年に死去したサウンド・スケープの提唱者であるカナダの作曲家マリー・シェーファー批判が中心である。より正確には彼の歴史観や音楽観を論点にしている。特に、レコードによる再現芸術、機械化、絶対音楽（修道院からコンサートホールまで閉じた空間で行われ、聴衆は静かに集中して聴く）、「音楽の帝国主義」（大きな音）、楽譜主義に対して、これらは不当な見解であると言う。この点に関しては、同意できる面が多いが、また別の面も指摘できるだろうと思われるので後述する。

以上が、本書「政治と音楽」の概略である。対象がここまで広範囲に渡っていると、章に分類し、文字化し一冊の本にすることは容易なはずもない。多くの短いコラム（7本）と補論は興味深い論考ばかりであったが、ここでは触れる余裕はなかったことを特記したい。

以上、「未踏の領域が切り開かれた」と書いたが、本書の論文筆者にはすでに「政治と音楽」に対する濃密な研究がそれぞれある。それらの研究群をまとめることで、新しい視界が広がってくる。それこそが本書の国際関係論の中での位置だろう。アンソロジーが編まれるのは、そこに何らかの動静があるときである。政治と音楽、あるいは政治と芸術の関係を深めてゆく「初発の出所」となるのではないか。

3. 音楽学、音楽社会学からの政治へのアプローチ

主に国際関係論研究者、国際政治学者から近現代音楽についての分析が重層的、多面的に行われたが、これらすべての論評をする能力は評者には欠如している。そのことを承知の上で、音楽学や音楽社会学ではどのように考えるのかと大きく構えるよりも、どうこの論考群が評者には見えているか、その有効性はどこにあるのかを考えたほうがいだろう。まず音楽学ではどのような研究が対象とされているかを一瞥し、そのあと比較として本書のポジションを明示してゆきたい。

たとえば、日本ポピュラー音楽学会を取り上げてみる。2019年が設立30年記念であったこの学会だが、その前年に行われた記念シンポジウムの登壇者の論文が「レトロスペクティブ」として掲載された。三井徹、小川博司、細川周平、井上貴子の四氏の論文はそれぞれ以下のような内容を扱っている。

日本のレコード産業を分析した三井論文（1983年発表、以下同じ）、アナログとデジタルやアイドルに対し社会的アプローチを確立しようとした小川論文（1981年）、戦間期ドイツのジャズの録音や演奏がされていた実態を明らかにした細川論文（1990年）、南インドのサバルタンの芸術イデオロギーを考察した井上論文（1995年）。広域に渡る研究が行われていたことがわかり、方法論としては史学、社会学やジェンダー・スタディーズなどが方法論として行われていたことがわかっていただけだろう³。

また、1952年にその母体が設立された日本音楽学会では、多くの研究が提示されているが、音楽的分析や奏法の比較といったものは少なく、美学的なアプローチ、作曲家研究が主流である。そして西洋クラシック音楽から西洋現代音楽が主題になっている。バロックからワーグナー、サーリアホまで扱っている。西洋クラシック音楽が規範として機能しているとみなすことができる。

一方、この『政治と音楽』である。すぐに気づくこととして、多くの論考が「国歌」を扱っていることである。国民国家の枠組みの中での音楽としての国歌や「第二の国歌」が頻繁に話題に上がる（3つの章と補論は「国歌」論である）。これは政治学の範囲では既定なのだろうか。音楽学の中で国歌が研究対象として扱われることには稀である。

このことは表現を変えると、国家形成と「国歌anthem」、またその歌詞は切り離せない関係にあり、必然的に分析対象となる。「ネーション・ビルディングと国歌」という主題である。

しかし、(国際)政治学でも認識されているように、ナショナリズムを「想像の共同体」や「エトニー」から分析するだけではなく、より一般の商人や工場労働者、オフィスワーカーのような市民レベルでナショナルな意識がどのように構築されてゆくのかという研究も進んできている。五野井論文（p.131）に類似の短い記述があるが、「日々のナショナリズム」everyday nationalism という観点も有効だろう。たとえば、Van Ginderachterは、「トリクルダウン・ナショナリズム」と「日々のナショナリズム」を使い分け、19世紀以降のベルギーの社会史をまとめている⁴。こういうナショナリズムの考え方は他の地域の研究者からもすでに出てきている。ナショナリズム、あるいは国家

3 「ポピュラー音楽研究」[2019]

4 Maarten Van Ginderachter [2019] を参照

をいくつかのティアで分析することも必要ではないだろうか。音楽は日常のものであり、それが国家形成とどう関係するのかという問いである。たとえばクラウド・ドッズはマイケル・ビリッグを紹介し、「強い感情」だけがナショナリズムになるのではない事例として天気予報を挙げている⁵。

次に、本書の分析対象として扱われる音楽は、西洋「クラシック」音楽であり、ジャズであり、アラブ地域のポップスである。「日本」の音楽は細田論文のみである。もちろん、西洋音楽が現代の記譜や音階の規範になっている以上、それは当然のことかもしれない。これは「ないものねだり」かもしれないが、日本の邦楽、たとえば地唄や三味線、演歌（演説歌の省略形）にも政治的な要因が含まれている。むしろ日本中世の音楽には、権力関係が生々しい形で露出している。「勸進帳」からしてそういう面がある。著者たちの主な関心が西洋音楽にあるので、それは織り込み済みののだろうか。

編者半澤朝彦のこの本を編むまでの労苦は想像に余りあるものである。先述の通り広範に渡る問題なのだ。その象徴的な部分が終章（第12章）のシェーファー批判だろう。西洋クラシックの聴き手としては、この批判はむしろ不可欠だといえる。シェーファーの「楽音だけが特権的な地位」を得たという主張が仮にあるとしても、それはある特殊な階級、それもその一部で起きたことだろう。また「再現芸術」と言っても、物理波動的に再現されているはずもない。プロの演奏家は自筆譜をまず確認するものだ。だが楽譜とは、音楽の音高、音長、音量の提示があり、あとは「熱情的に」などといった主観的な解釈がいかようにも可能な指示があるだけである。「絶対音楽」についても、いまはより開かれた音楽にする営みが積極的に行われている。

マリー・シェーファーの『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』が上梓されてすでに50年近くが経過し、社会も変化した。おそらく興味深いのは、シェーファーが提示したサウンド・スケープの概念が実社会に投入されたことだろう。音を使ったアート、また都市計画や設計時のトータル・ランドスケープの中に音の要素が組み込まれるようになったことには枚挙にいとまがない。たとえば街路樹を選定する場合、樹木が熱や乾燥に強いといった要素もあるが「葉擦れ音」も考慮の対象になる⁶。ポプラ、クスノキ、モウソウチクなどの物理特性として樹木葉擦れは100~1,000Hz（中音域ということ）であり、自動車走行音のマスクングに有効であるという。都市と音響について建築家は考えるようになった⁷。こういう側面にも目を配ることもありえよう。

4. 国民国家、ポスト国民国家と音楽、本書の課題

話を街路樹から国家に戻そう。すでに本書の課題、というよりもこれからの「政治と音楽」の相関を考察してゆく場合、直前で述べたような多様なナショナリズムと国民国家の関係の考察の他にもいくつか考えてみたい。

それはまず音響である。

話題が拡散しないようにするため、いまは映画音楽だけを脳裏に浮かべていただきたい。映画音楽は、有名な映画には付き物であり、映画音楽のほうが著名な場合もある。ギャグとして扱われることもある『タイタニック』や『アナと雪の女王』のようなメロディー中心の音楽を想起されたはずである。

しかし、ここ20年ほどで映画音楽の位置付けは劇的に変わっている。テーマ・ソング、ライト・モチーフ（特定の役柄に割り当てられたメロディー）といった傾向は消えつつある。音楽的要素がなく無音であり、効果音だけの映画も増加した。ドイツ系の作曲家ハンス・ジマーは、メインテーマを残しつつも、低音や重低音を効果音として使っている。ルドウィグ・ゴランソンもその系統であろう。「映画音響」と呼べる新しい動きが明確にある。メロディー重視から、アルペジオ（和音

5 Klaus Dodds [2021] ここではBanal Nationalismの紹介になっている。

6 小松正史 [2005] では道路沿道の視聴覚相互作用が検討されている。建築や土木でのサウンドスケープについての研究は多数。

7 R. Murry Schafer [1977] とくに第II章。

を単音で奏でる) やトーン・クラスター (いくつかの音の塊で、音階が不明確なもの) 重視の傾向が見えている。中世の音楽の特徴に似通っているため、この現象を「ネオ中世主義」や「聴覚の新中世化」と呼ぶ場合も稀にある。

こういった音楽の変調は、精神や感情のどのような変化からもたらされているのか。その研究方法も含め、考えてゆきたいところだろう。これは音楽と政治、社会の相互の影響やゆらぎ、自己組織的面もあるかもしれない。2022年2月24日のロシア軍侵攻で、ロシア軍、ウクライナ軍双方ともプロパガンダ映像に音楽がついていることがままあるが、それがまさに重低音重視の「映画音響」だ。

第8章の前田論文には直接の言及はないが、ゲームにもそういう音楽傾向はある。ただそれは主流ではないようだ。もっとも人気があるゲームのひとつ、“Call of Duty” (画像 I、発売元アクティヴィジョン) は、テーマ曲として機能しているオーケストラ作品がいくつかある。このゲームは基本的に特殊部隊とゲリラ部隊が戦うという形式を取っている (ただしモバイル版)。詳細は、評者が途中でやられてしまうので不明である。



画像 I “Call of Duty”, モバイル版より。照準を合わせ「敵」を撃っている場面。プレイヤーは主体化される。また画面右上にマップがあり位置情報が更新され、それを参考に戦う。

最後に、本書で扱われている「ソフトパワー」の意味を明確にしておきたい。ジョセフ・ナイはソフト・パワーを以下のように定義している。

「ソフト・パワーは影響力と同じではない。影響力には威嚇や報酬というハード・パワーに基づくものもあるからだ。説得力、つまり議論によって他人を動かす力はソフト・パワーの重要な一部ではあるが、すべてではない。ソフトパワーは他人を引きつける魅力であり、魅力があれば、他人は黙って従おうとすることが少なくない。単純化するなら、ソフト・パワーとは行動という面で見れば、魅力の力である」⁸としている。この定義を踏まえつつ本書ではソフトパワーを「ジョセフ・ナイの概念よりもはるかに範囲が広いだけでなく、質的に異なるものである」(p.x) と別の定義を与えている。もしそうであるなら、別の用語、タームを付与したほうがより発展性が確保されたかもしれないと思う。

とはいえ、いままでいくつかの視点から記してきたように、政治と音楽の関係、あるいは政治と芸術の関係には強い結びつきがある。政治学や国際関係学の中で、本書は前例がほとんどなく、そして国際政治学を展開させる回転軸でありプロペラともなる書籍であることに間違いはないだろう。

8 Joseph S. Nye, Jr. 2004 p.27

参考文献

〈邦文献〉

- 小松正史 [2005] 「道路沿道のサウンドスケープ」騒音制御：Vol.29, No.4
武邑光裕 [2018] 『ベルリン・都市・未来』太田出版
鳥越けい子 [1997] 『サウンドスケープ その思想と実践』SD選書：鹿島出版会
「ポピュラー音楽研究」 [2019] Vol.23

〈欧文献〉

- Michael Denning [2015] *Noise Uprising: The Audiopolitics of a World Music Revolution*: Verso
Klaus Dodds [2021] *Border Wars*: Ebury Press (野田敦夫訳『新しい国境 新しい地政学』東洋経済新報社、2021年)
Maarten Van Ginderachter [2019] *The Everyday Nationalism of Workers*: Stanford University Press
Linda Nochlin [1989] *The Politics of Vision: Essays on Nineteenth Century Art and Society*: Harper & Row (坂上桂子訳『絵画の政治学』ちくま学芸文庫、2021年)
Joseph S. Nye, Jr. [2004] *Soft Power: The Means to Success in World Politics* (山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞社、2004年)
Alex Ross [2007] *The Rest Is Noise: Listening to the Twentieth Century*: Farrar, Strauss and Giroux (柿沼敏江訳『20世紀を語る音楽』1、2 みすず書房、2010年)
R. Murry Schafer [1977] *The Tuning of the World*: Random House (鳥越けい子、小川博司、庄野泰子、田中直子、若尾裕訳『世界の調律 サウンドスケープとは何か』平凡社、1986年)
Christopher Small [1998] *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*: Wesleyan University Press (野澤豊一、西島千尋訳『ミュージッキング 音楽は〈行為〉である』水声社、2011年)

映像

- Matt Schrader [2017] : *Score: A Film Music Documentary*: Epicleft Media (『すばらしき映画音楽たち』)